

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

平成31年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第2号（5月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：[nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)

## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)  
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

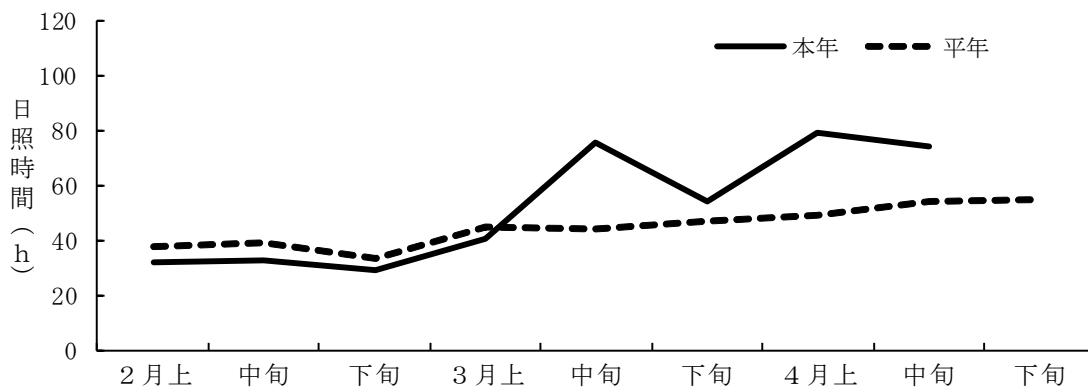
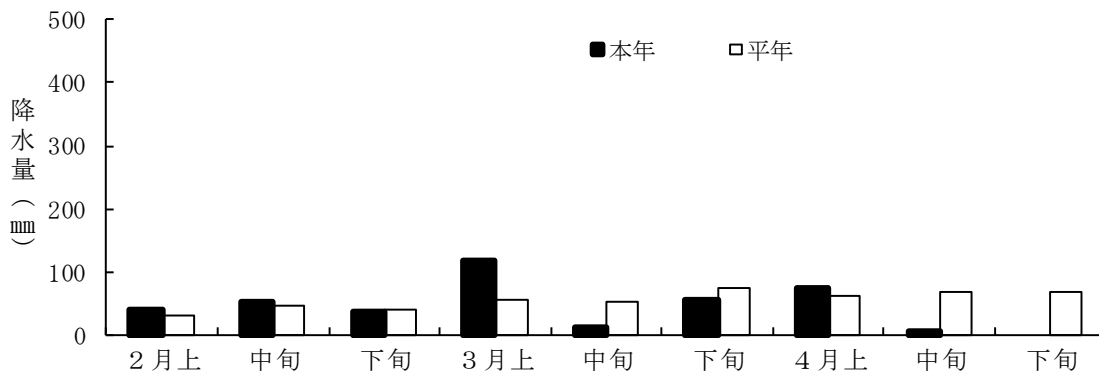
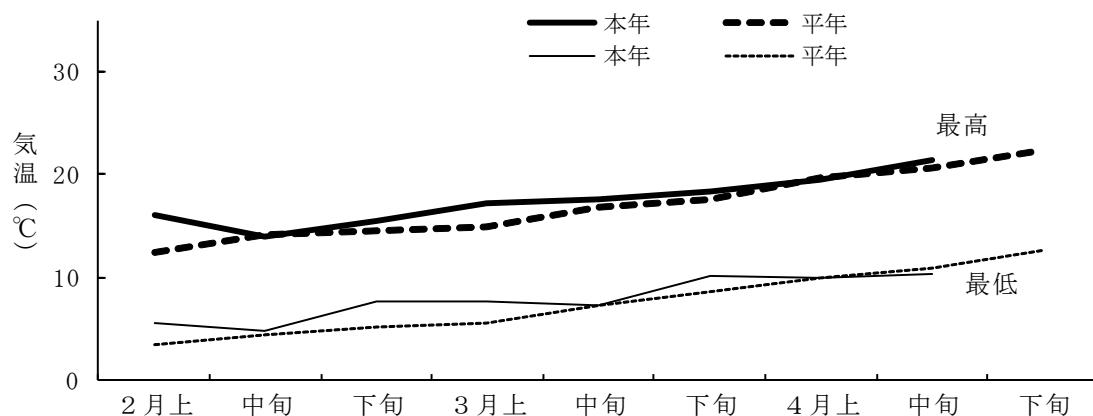
**農薬ラベルを確認しましょう。**  
**農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。**

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（4月27日から5月26日） 平成31年4月25日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（%）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	40	30	30	九州南部の気温と降水量はほぼ平年並みで、日照時間は平年並みか多い見込み。奄美地方の気温、降水量、日照時間はほぼ平年並みの見込み。
	奄美地方	30	40	30	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	30	40	30	

II. 2～4月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



## 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	葉いもち	並	並
野菜	トマト	灰色かび病	多	多
	ピーマン	斑点病	並	並
		うどんこ病	やや多	多
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	やや多	やや多
		アザミウマ類（県本土）	並	やや多
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
	ナシ	黒星病	並	並
			並	並
茶樹	チャ	炭疽病	—	やや多
		チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	やや多	やや多
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	やや少
		チャノキイロアザミウマ	少	やや少
		カンザワハダニ	並	やや多
		クワシロカイガラムシ	—	並

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 普通作物

#### 1. 早期水稲

##### (1) 葉いもち

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

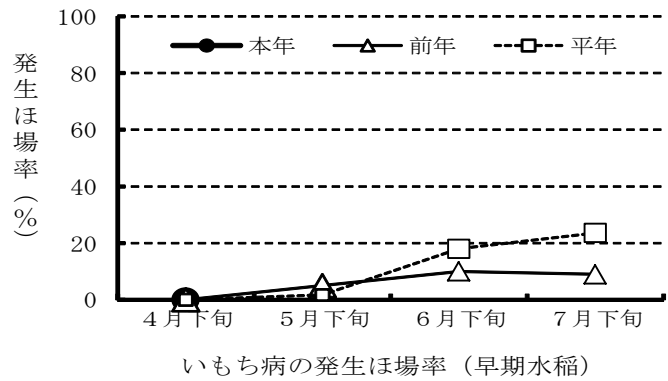
発生ほ場率0%（平年0%）：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 補植用の置き苗は発生源となることが多いので、早めに処分する。

(イ) 窒素肥料の多施用は発生を助長するので注意する。

(ウ) 本病の常発地や前年の多発ほ場では発生に十分注意し、発生を認めたら直ちに防除を行う。



### II. 野菜

#### 1. トマト

##### (1) 灰色かび病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 促成栽培

(ウ) 発生量 多

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率71%（平年53%）

：高い（+）

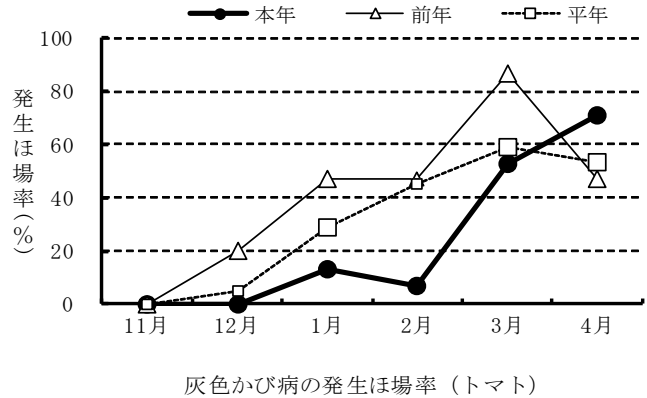
###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。

(イ) 果実部やへたの付近に付着する花卉は本病の発生源となるので、こまめに除去する。

(ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### 2. ピーマン

##### (1) 斑点病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 促成栽培

(ウ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

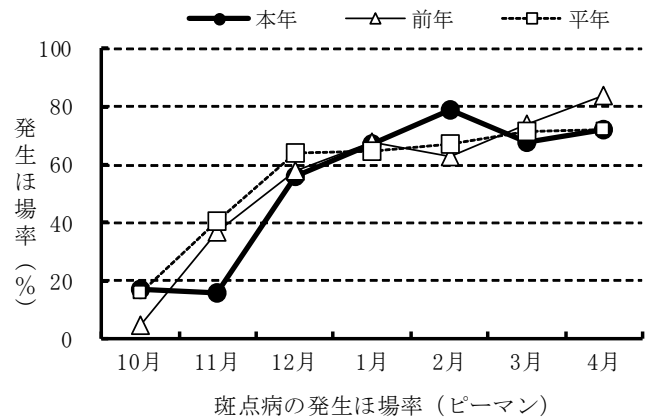
(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率72%（平年72%）：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。

(イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。



- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) うどんこ病

ア 予報内容

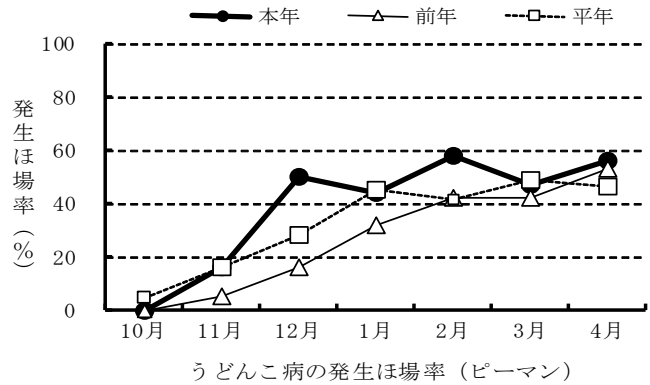
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率56%（平年46%）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 草勢低下は発生を助長するので適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. トマト黄化葉巻病 (TYLCV), キュウリ/メロン退緑黄化病 (CCYV), キュウリ/メロン黄化えそ病 (MYSV)

これらの病原ウイルスはタバココナジラミやミナミキイロアザミウマにより媒介される。今後これら媒介虫の活動が活発となり、ウイルスを保毒した成虫がハウスの外に飛び出すので、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ハウス外への飛び出しを防ぐため、栽培終了まで防除を徹底するとともに、防虫ネットは継続して設置しておく。
- (2) 栽培終了後は抜根し、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

2. イチゴのハダニ類 (本ぼ)

栽培終了後の本ぼから苗床への侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ハウス外への拡散を防ぐため、栽培終了まで防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (3) 栽培終了後は抜根し、ハウスを確実に密閉して、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

3. イチゴのハダニ類 (苗床)

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることが多いことから、苗床での防除を十分に行う必要があるため、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。
- (2) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

4. イチゴ炭疽病 (苗床)

イチゴ炭疽病は風雨や灌水のはね上がりにより感染が広がる。また、気温の上昇に伴い発生が多くなるため5月上旬から感染好適期となる。健全な苗を確保するためにも、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。
- (2) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (3) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (4) 薬剤による予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (5) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。
- (6) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

### Ⅲ. 花き (キク)

#### (1) ハダニ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

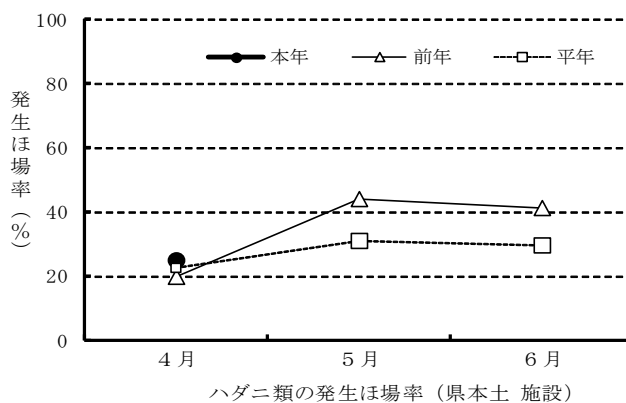
##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率25% (平年23%)：並  
発生程度の高いほ場を認めた (+)

##### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。
- (イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。
- (ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### (2) アザミウマ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 やや多

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20% (平年18%)：並

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV),

キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および初期防除に努める。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

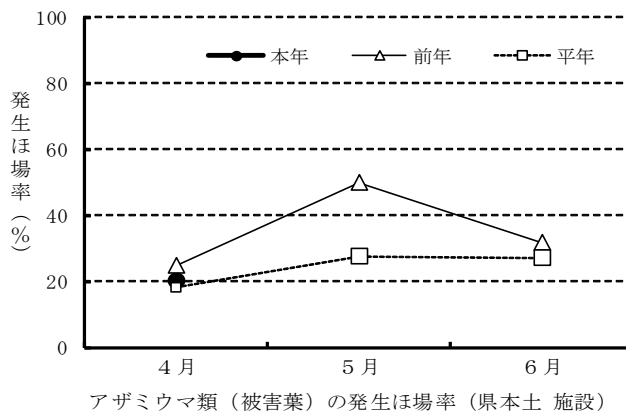
(ウ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) クログハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



#### IV. 果 樹

##### 1. カンキツ

###### (1) そうか病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

###### (イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

###### イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 3% (平年 2%)：並

発病葉率0.01% (平年0.0%)：並

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

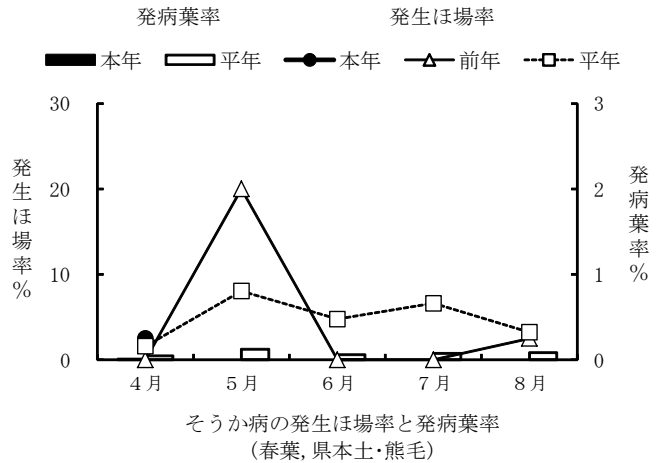
発生ほ場率 14% (平年 6%)：やや高い(+)

発病葉率0.1% (平年0.1%)：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 落花期の防除適期を逸しないように努める。

(イ) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は薬害を生じる恐れがあるので、間隔は30日以上あける。



###### (2) かいよう病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

###### (イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや少

###### イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや多

発生ほ場率 13% (平年 4%)

：高い(+)

発病葉率0.1% (平年0.1%)：並

旧葉(3月) 発生ほ場率40% (平年25%)：高い(+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

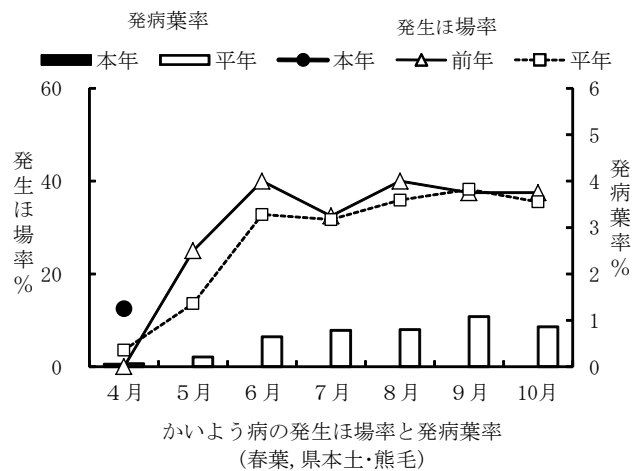
発生ほ場率0% (平年 10%)：やや低い(-)

発病葉率0% (平年0.1%)：やや低い(-)

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 平年より旧葉での発病が多く、早期感染の可能性があるので、春葉が硬化する前までに予防散布を徹底する。

(イ) 銅水和剤の使用にあたっては、薬害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 5% (平年 8%)：並

寄生葉率0.04% (平年0.5%)：やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

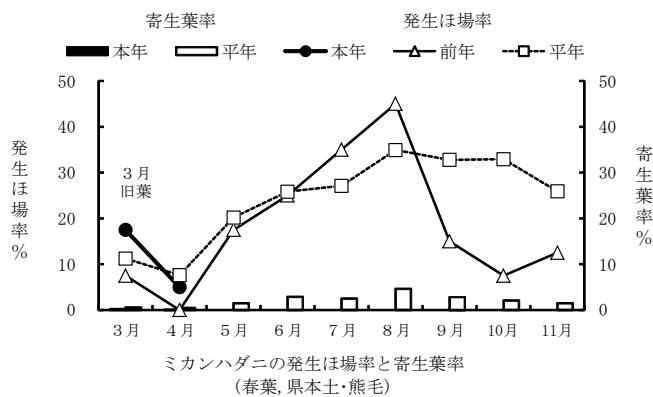
発生ほ場率 14% (平年 13%)：並

寄生葉率0.1% (平年0.3%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。



2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(葉) 発生量：並

発生ほ場率(葉) 13% (平年 18%)

: 並

発病葉率(葉) 0.3% (平年0.4%)

: 並

発生ほ場率(果実) 0% (平年 22%)

: やや低い (-)

発病果率(果実) 0% (平年2.5%)

: やや低い (-)

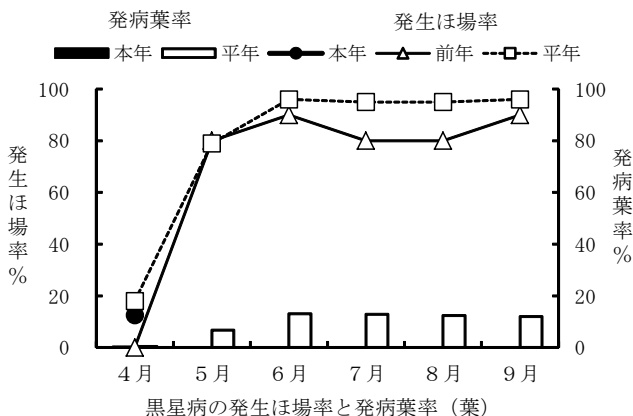
果そうでの発病を複数認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 病原菌は春先の降雨で伝搬され、葉や果実が感染すると2~3週間の潜伏期間を経て発病する。

(イ) 防除は新梢伸長期までを重点に、約10~14日間隔で予防散布を行う。なお、薬剤散布は天気予報に留意し降雨前に行う。

(ウ) 耐性菌の発生リスクが高まるので、同一系統薬剤(SBI剤等)の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。





防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) チャノキイロアザミウマ

防除は第2世代以降、発生ピーク日の10日前から発生ピーク日までに行う。

表 成虫の発生ピーク予測日 (4月23日予測)

世代	阿久根		さつま柏原		川内		東市来		鹿児島		加世田	
	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年
1	5/7	5/2	5/9	5/6	5/8	5/3	5/3	4/28	4/22	4/21	4/27	4/24
2	6/7	6/1	6/7	6/4	6/6	6/1	6/5	5/28	5/22	5/19	5/29	5/24

世代	枕崎		指宿		志布志		鹿屋		肝付前田		内之浦	
	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年
1	4/26	4/23	4/26	4/23	5/1	4/28	5/1	4/28	4/28	4/27	4/26	4/26
2	5/28	5/23	5/27	5/23	6/2	5/30	6/1	5/29	5/29	5/28	5/27	5/28

注) 予測は(社)日本植物防疫協会のJPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションversion2により行った。

有効積算温度予測に用いた気温はアメダスの観測値で1月1日を起算日とし、本年4月23日以降は平年値を使用した。

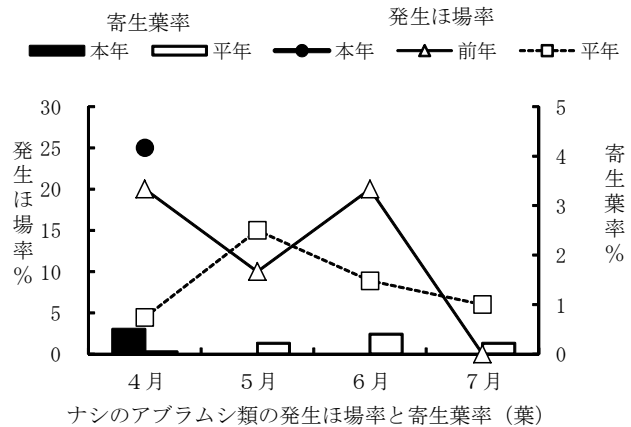
2. ナシ

(1) アブラムシ類

ナシでは発生が多くみられる。

ア 園地によって発生量に差がみられるので、発生状況をよく把握して防除を行う。

イ 薬剤散布が遅れると縮葉して十分な防除効果が得られないので、早期防除を心掛ける。



V. 茶 樹

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

定点無防除園での越冬病葉(4月上中旬) 195枚/m<sup>2</sup>(平年97.4枚): やや多(+)

昨年の秋芽生育期における発生: 並~やや多

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 一番茶摘採残葉に発生の多いほ場では、二番茶萌芽~1葉期に防除を行う。

(2) チャノココクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生時期 チャノココクモンハマキ 並

チャハマキ 並

(ウ) 発生量 チャノココクモンハマキ やや少

チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
<b>【巡回調査】</b>		
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	0% (平年2%) : やや低い (-)	7% (平年0%) : 高い (+)
発生虫数	0頭 (平年0頭) : やや少 (-)	0.1頭 (平年0頭) : 多 (+)
発生程度		低い (-)
<b>【定点調査 越冬世代の最盛半旬】</b>		
知覧(フェロモントラップ)	4月4半旬 (平年4月4半旬) : 並	4月2半旬 (平年4月2半旬) : 並
有明(20W蛍光灯)	4月2半旬 (平年4月4半旬) : 早い	4月2半旬 (平年4月2半旬) : 並
<b>【定点調査 越冬世代誘殺数】</b>		
知覧(フェロモントラップ)	1179頭(平年370.3頭) : やや少 (-)	1,021頭(平年420.9頭) : 多 (+)
有明(20W蛍光灯)	98頭(平年152.8頭) : やや少 (-)	42頭(平年85.3頭) : やや少 (-)

注) 定点調査の越冬世代数は知覧が3月1半旬～4月3半旬、有明が3月1半旬～4月2半旬の合計

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は、発蛾最盛日をフェロモントラップ等で調査し、若齢幼虫期に行う。

(イ) ハマキ天敵を散布する場合は、発蛾最盛日から16～22日後に実施する。また、薬剤との混用や近接散布を行う場合は薬剤選定に注意する。

(3) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生時期 並

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 4% (平年6%) : 並

発生虫数 0.2頭 (平年0.2頭) : 並

定点ほ場での越冬世代の発蛾最盛日

知覧(フェロモントラップ) 3/28 (平年3/29) : 並

有明(20W蛍光灯) 3/27 (平年3/27) : 並

定点ほ場での越冬世代の誘殺数(知覧が3月1半旬～4月3半旬、有明が3月1半旬～4月2半旬)

知覧(フェロモントラップ) 591頭 (平年774.9頭) : 並

有明(20W蛍光灯) 112頭 (平年362.0頭) : やや少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 一番茶残葉での巻葉及び発生状況を確認し、防除は二番茶萌芽期～1葉期に実施する。

(イ) 南薩地域の一部の茶園では、ジアミド系薬剤に対する感受性が低下している事例もあることから、薬剤の選定に当たっては注意する必要がある。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや少

チャノキイロアザミウマ やや少

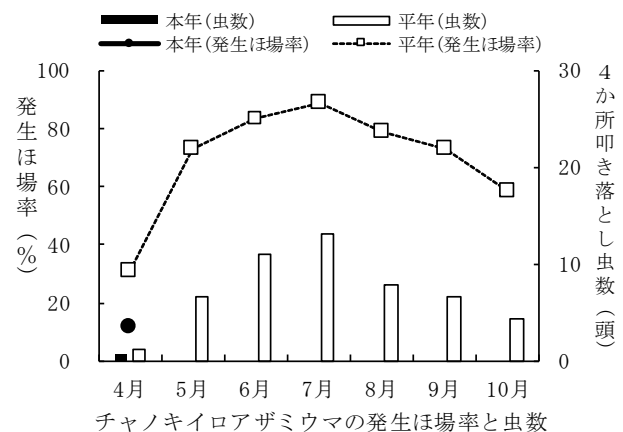
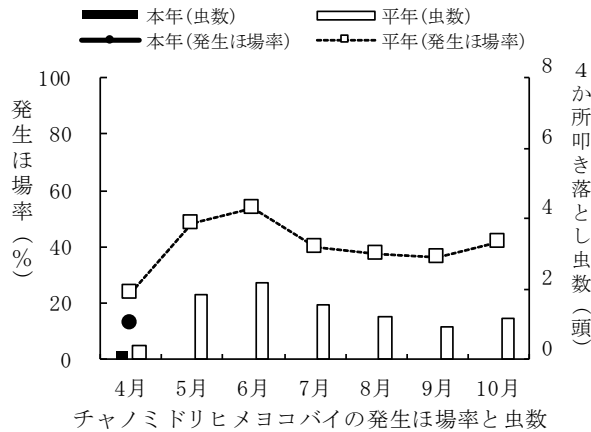
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(4月中旬)

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや少	少
発生ほ場率	13%(平年 24%) : やや低い(-)	12%(平年 31%) : 低い(-)
虫数(4か所たたき落とし)	0.2頭(平年0.4頭) : やや少(-)	0.8頭(平年1.2頭) : 並
【定点調査 無防除園】		
虫数(50回すくい取り・たたき落とし)	0頭(平年0.1頭) : 並	4頭(平年0.7頭) : やや多(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生の多いほ場では、二番茶萌芽期に防除する。



(5) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 58% (平年 49%) : 並

寄生葉率 8.1% (平年 4.5%) : やや高い(+)

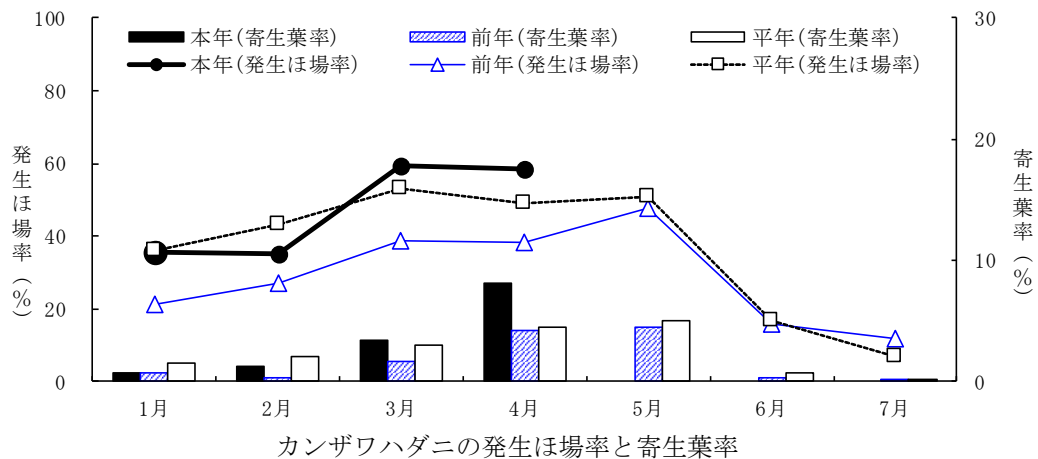
定点無防除園の寄生葉率(4月中旬) 9% (平年 4.0%) : やや高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生の多いほ場は、一番茶の刈番茶摘採後に防除する。

(イ) 天敵の働きが活発になる時期なので、天敵に影響の少ない薬剤を選定する。

(ウ) 薬剤は、裾部・葉裏に十分にかかるよう留意する。



(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生時期 やや遅い
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果（平成30年10月）：並  
発生ほ場率45%（平年 55%）：やや低い（-）  
寄生株率18%（平年23.2%）：やや低い（-）  
発生程度の高いほ場を認めた（+）

(イ) 発生時期

定点（茶業部）での1月1日からの有効積算温度は4月24日現在193.9日度で、今後の平均気温が平年並みに推移すると、ふ化最盛日は5月12日頃（実測値：前年5月4日、前々年5月14日）と予測される。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除適期となるふ化最盛期は、地域により異なるので、発生園では寄生枝を採取し、ふ化状況等を確認して防除する。
- (イ) 多発園では中切り更新と併用して、ふ化最盛期に防除を行うと効果的である。
- (ウ) 散布は薬剤が枝や幹に十分かかるようにする。

.....  
防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

県内本土全域及び屋久島地区で発生がみられ、一部で多発ほ場も確認されている。多発するとほ場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

- (1) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高く、5月のクワシロカイガラムシふ化最盛期とチャトゲコナジラミの若齢幼虫期がおおむね合うので、アプロードエースフロアブル散布による同時防除が可能である。
- (2) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除の際は葉裏にかかるように10a当たり400ℓの散布量で丁寧に薬剤散布を行う。また、裾刈りはチャトゲコナジラミの除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。
- (3) 有力天敵シルベストリコバチの定着茶園では、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。